

【漢方医学の四診（望、聞、問、切） 切診 まず脈診です】

切診には脈診と腹診があり、触診によって病態を知ります。

漢方的に脈は浮、沈、遅、数（さく）、滑、洪（じゅう）、虚、実、長、短、洪、微、緊、緩、弦、孔、革、牢、濡（なん）、弱、散、細、伏、動、促、結、代（たい）、疾の28脈があります。西洋医学的に脈を診る場合は、まず脈拍数をみます。

正常は毎分60～100ですから、これより速い場合を頻脈、おそい場合が徐脈ですが、漢方では前者を数、後者を遅とよびます。リズムの不整には、洞性不整脈、期外収縮（上室性、心室性）、刺激伝導障害があり、これらは心電図によって鑑別しますが、陽証の不整脈を「促」、陰証の不整脈を「結」、期外収縮を「代」とよびます。

西洋医学では触診している指をもち上げる強さから脈拍の大、小をみますが、これは心臓から血液を全身へ拍出する力や動脈内の血液量、動脈壁の緊張の状態で異なります。漢方的に大脈は「浮」、「洪」、小脈は「沈」、「細」とよびます。また触診する薬指によって血管を圧迫し、人差し指、中指に脈が触れなくなるのに要する力の程度によって脈の緊張度をみています。緊張度の高いものが硬脈、低いものを軟脈とよびます。

漢方的には前者は「緊」、「実」、後者は「緩」、「微」とよびます。緊・実の程度のやや軽い場合が弦脈で、肝疾患や呼吸器の疾病の場合にあらわれることが多いといわれます。

西洋医学では脈拍が急激にふれて消失するものを速脈、徐々に高くなって消えるものを遅脈とよびますが、漢方的には前者が「滑」、後者は「洪」とよびます。滑脈は玉をころがすように、なめらかにやってくるという表現があります。水分の代謝障害、消化吸収力の低下、妊娠時にでやすい脈象です。洪脈のもっとも弱い状態を「蓄（しょく）」とよびます。

西洋医学的な脈の診かたと漢方的な脈を対比して考えてみましたが、全く一致するわけではありません。しかし病態を理解するために、脈診は大切な診察手技であり、注意深い観察と経験のなかで体得されるものと考えています。